

四條畷市未来教育会議（令和元年度第2回）
議事摘録

四 條 畷 市

1 令和2年1月29日 午後7時 四條畷市役所委員会室において、四條畷市未来教育会議を開催する。

2 出席者

未来教育会議委員長	東 修平
未来教育会議副委員長	植田 篤司
未来教育会議委員	和田 良彦
未来教育会議委員	藤原 由美 (欠席)
未来教育会議委員	白井 智子 (欠席)
未来教育会議委員	中原 健聡
未来教育会議委員	佐々木 千里
未来教育会議委員	二見 真美

3 事務局出席者

教育次長兼教育部長	開 康成	
総合政策部長兼魅力創造室長	藤岡 靖幸	
市民生活部長	山本 良弘	
子ども未来部長兼福祉事務所長	森田 一	
健康福祉部長兼福祉事務所長	松川 順生	
健康福祉部次長兼福祉事務所次長兼保健センター所長		豊留 利永
危機統括監兼総合政策部次長兼秘書政策課長		喜多 計成
教育部次長兼学校教育課長	上井 大介	
教育部上席主幹(教育総務担当)兼学校教育課人権教育・教科指導担当課長		木村 実
秘書政策課事務職員	安田 直由	

4 会議録作成者

秘書政策課事務職員	安田 直由
-----------	-------

5 案件

- (1) 基本理念・基本方針について
- (2) その他

<p>総合政策部長兼魅力創造室長</p>	<p>それでは定刻になりましたので、令和元年度第2回未来教育会議を開催させていただきます。本日は大変お忙しい中お集まりいただきまして誠にありがとうございます。</p> <p>まず、本日は藤原委員と白井委員が所用により欠席でございます。出席されている委員の方は6名、欠席委員が2名ということで、四條畷市未来教育会議規則第3条第2項の規定に基づき、委員の半数以上が出席されてございますので、会議が成立することをご報告いたします。</p> <p>本日の会議は、少し遅くからということで、最長9時までを予定としておりますので、本日も円滑な会議の進行にご協力をお願い申し上げます。</p> <p>また、会議につきましては、録音をさせていただきます、会議録を作成しますので、お手元でございますマイクをお使いいただきましてご発言いただきますようよろしくお願いいたします。</p> <p>それでは本日の資料を確認させていただきます。</p> <p>次第が1枚、資料番号1「第1回未来教育会議の課題意見の整理表」というものでございます。こちら、前回いただきました会議の中から、4つに分類いたしまして、主な課題意見ということで取りまとめをさせていただいております。</p> <p>それと、資料番号2「教育大綱たたき台」をご覧ください。まず1ページに、「はじめに」から「根拠法令」「大綱の期間」「教育大綱の位置付け」と、2ページに、「体系図」としまして、3ページ、4ページに「基本理念」「基本方針」ということでございます。こちらにつきましては、あくまでもたたき台ということですので、参考にいただきながらご議論いただけたらいいかと思っております。</p> <p>次に、資料番号3「各委員からの事前意見について」でございますが、あらかじめ委員の皆様におきましては、資料番号1、2をご送付させていただきます、資料について事前にご意見をいただける場合につきましては、事務局にご連絡をいただくということでご依頼をさせていただいております。和田委員、中原委員そして本日ご欠席の藤原委員、白井委員の4名様からご意見をいただいております。</p> <p>次に、資料番号4と資料番号5につきましては、後程、副委員長よりご説明をさせていただく予定にしております。最後に先ほどお配りいたしました「第二期未来をつくる社会教育プラン」ということで資料をいただいております。資料の説明は以上でございます。</p> <p>それでは、東委員長よりご挨拶を申し上げます。</p>
----------------------	---

東委員長	<p>本日も皆様大変お忙しいなか、そして開始時間が少し遅い時間帯にも関わりませず、ご出席賜りまして誠にありがとうございます。</p> <p>この間、第1回の時にはたくさん議論を拡散させていく形で議論いただきました。その上で、最終的に回数は3回を予定しておりますが、第3回の着地に向けて、今回の第2回は文言を具体化していくという作業に移らせていただけたらと思います。</p> <p>とりわけ本日は理念の部分、方針の部分、この辺りを一定ご議論いただいて、そちらが固まれば、教育大綱としての形づくりができていけるかなと思いますので、本日もたくさんご意見をいただきながら、議論ができればと思いますので、何卒よろしくご意見申し上げます。挨拶に代えさせていただきますと思います。</p>
総合政策部長兼魅力創造室長	<p>ありがとうございました。それでは引き続き委員長、会議の進行をよろしくお願いいたします。</p>
東委員長	<p>はい。それではお手元の次第に従いまして進めさせていただきます。1番、基本理念、基本方針についてでございます。先ほど、事務局から説明がございました。事前に資料のご確認をいただき、また貴重なご意見いただきましたこと、誠にありがとうございます。</p> <p>まずは、文面上、資料としてはございますけれども、委員にご出席をいただいておりますので、事前にいただいた意見も確認しつつ、改めて、簡単にご趣旨等をご説明いただけたらと思いますので、もし、よろしければ和田委員の方からまずお願いしてもよろしいでしょうか。</p>
和田委員	<p>私の方からまず、意見を述べさせていただきます。まず、この資料2をいただいて感じたことなのですが、これは資料3の意見に書かせていただいているのですが、基本理念と基本方針が、どういうものをめざしているのかというイメージが、なかなか私には伝わってこなかったのです。</p> <p>特に、今考えようとしているのは大綱なので、本当に、四條畷の子ども達はこんなふう育てたいんだとか、学校と地域とそして行政がどんなふう繋がつているのか、そういう大きな理念を大綱に盛り込むべきなんだろうなというふうに考えていまして、その点で言うと、どちらかというところすべて書いていただいている方針が、「支援します」「支援します」「支援します」と後ろにありますので、次の大綱の下のいろんな方針を考える時の言葉なのかなというふう感じたところです。</p>

<p>和田委員</p>	<p>前は、それぞれの専門、それぞれの関わっている分野から、いろいろな課題を出し合ったのですけれども、今日は本当に四條畷の子どもがこんなふうに育って欲しいとか、学校はこんなふうになって欲しいとか、そのために行政はこんな支援をして欲しいとか、そういう大きな話をする事ができればと思っています。</p> <p>それで、今日資料として勝手に持ち込みをさせてもらったんですね。たまたま手元に堺の教育プランがありまして、その1ページの下の方です。枠囲み、四角で囲んでるところなんですけど、堺市教育大綱というのが書かれています。</p> <p>目標としては、すべての堺っ子が尊重され、夢に挑戦できる教育、重点方針として1、2、3、4で挙げられています。割と細かいことはあんまり書かれてないのです。つきましては、大綱というのは、これぐらいの表示がいいのかなという気がします。</p> <p>あと、例えば大阪府であれば、育てたい子ども像は「チャレンジ」「自立」「自律」なんですね。だからそういう標語みたいなものを皆さんと一緒に考えたらいいなと思っています。まず私の意見は以上です。</p>
<p>東委員長</p>	<p>ありがとうございました。先に委員の皆さんからいただいた意見をひとまず聞かせていただいて、議論に入らせていただければと思います。それではよろしければ、次は中原委員にお願いしてもよろしいでしょうか。</p>
<p>中原委員</p>	<p>はい。今、和田委員からありました大きなビジョンとなるような形の文書、文言の使い方については特に意見はありません。私が意見させていただいた内容は、方針の箇所で意見を書かせていただきました。</p> <p>つきましては、先ほどの上位目標ではなく、具体的なところの意見になってしまいますが共有させていただきます。</p> <p>まず1点め、「家庭、学校、職域、地域」と含めて書いている点で、学校外の人と接する機会などで、プロジェクトベースドラーニング、ソーシャルエモーショナルラーニングといった児童・生徒の発育発達に応じて、外部の人と接する機会を学習過程としてどのように設けて、その効果をどのような形で整理し可視化するのかは、重要と思いました。</p> <p>2点めの乳幼児からという点で、幼小連携のロールモデルとして、別紙資料4に経産省の未来の教室事業である、高知のNPO法人SOMAが取り組んでいる事業は参考になると思います。</p>

<p>中原委員</p>	<p>3点め、「知識学力もさることながら、地域社会で」というところにおいて、保護者の方々や、教員の方々が中長期的な社会構造の変化や、これからの社会の状態を知る機会や考える機会が重要だと思います。佐賀県武雄市は花丸学習会さんと連携し、学習に取り組んだ事例がありますが、企業や学校が連携することで、大人が学ぶ機会を担保していくのが重要とっております。</p> <p>少し話はそれますが、私が関わっている札幌新陽高等学校でも、進路指導を進学指導や就職指導という考え方と混同しないように気を付けています。進路指導は進学指導ではありませんので、進路指導という考え方を保護者の方へ伝える機会が重要になると考えています。</p> <p>4点め、子どもの個性・特性というところで、個別最適化とありますが、この個別最適化を問題の難易度という勘違いではなく、その子にとってベストな学び方やツールなどの環境を選択できる状態にすることだと思います。</p> <p>5番めに関しては、教員免許制度にも関係する点ですが、子どもにとって教育環境の一部である大人のバックグラウンドが多様な学校構築が重要だと思います。臨時免許や特別免許を活用し、市ならではの教員養成・採用・研修システムを作ることにチャレンジしてほしいです。</p> <p>最後になりますが、四條畷の現状として、基礎自治体のICT整備に関する指数を調べたので共有させていただきます。四條畷市は、学習用PCの整備状況について、全国で1498位となっております。例えば先ほど話した武雄市は、先進的で30位です。</p> <p>3人で1台当たりの学習用PCを配備する場合、不足台数は1090台、1人1台の場合は、4099台が不足されているというのが、四條畷の現状になります。</p>
<p>東委員長</p>	<p>ありがとうございます。1400位以上、上がる余地があるということですね。前向きな意見かなというふうに思っております。ありがとうございます。議論は繰り返しになりますが、すべて聞かせていただいた後でさせていただけたらと思います。次に、欠席の藤原委員と白井委員の意見について、事務局から代わりにご説明いただけますか。</p>
<p>総合政策部長兼魅力創造室長</p>	<p>はい。それではまず藤原委員の方からですね、4点ご意見をいただいております。まず、社会に出た後、役に立つ力を養うような支援が大切というところですが、これにつきましては、前回の会議で</p>

<p>総合政策部長兼魅力創造室長</p>	<p>も出ていましたが、知識の陳腐化のスピードが速く、単なる知識ではなく、自分で考える力や自立した力等が社会においては求められるのではないかというご意見でございます。</p> <p>次に保護者や教員自身が今後の社会で求められている力に理解を深めるのはとても大変だと思いますが、ぜひ取り組んでいただきたいと考えますということです。これにつきましては、現在、大学進学等、高卒等での就職であれば、保護者を含めて大学進学を評価する風潮があると思いますが、高卒時点で就職することが適切な生徒に対しては、きちんとその方向を選択できるようにしたほうが良いということで、第1回めの植田教育長の話でもありましたが、府内の大学を卒業した方の15%が「正規の職員以外の就職、一時的な仕事就職準備中、その他」の進路となっており、大学に行ったからといって将来の進路が保障されるわけではないと考えるということです。</p> <p>次に3点めで様々な職業があることを生徒に早い段階から積極的に教えることは非常に有意義だと考えますということです。就職できていない若者は、職業に対する情報が非常に少ないと、また職業の魅力が教員が伝えることには限界があると考えており、リアルに伝えることのできる外部講師が有効と考えると、ただ、外部講師で企業の方をお招きした際には、その企業における話しか通常はできませんので、教員の方々が、業種とか、企業規模とか、職種等の違いがあることを生徒に示すことが必要かと考える、たくさんの違いがあることを知っていれば、就職活動に際して、今と職業が変わっていても、比較検討をしたり、自分で情報を取ることができるかと考えられています。</p> <p>最後に、前回の会議でもありましたが、教員が忙しすぎるという点についてです。教員自身が、今後の社会で求められる力に対して、理解を深めるためにも、知識習得の時間が必要です。また教員の業務の切り出し、教員以外でできることは、教員以外に担っていただくことが有効な場面があるのではということでございます。</p>
<p>総合政策部長兼魅力創造室長</p>	<p>続きまして白井委員の意見になります。2つのご意見でございます。</p> <p>まず方針1の学校等で教員が子どもをしっかり観察し、分析できる体制を構築するという点につきまして、分析するにとどまらず、それを子ども理解につなげるという意味の文言を足した方がよいのではないかとということと、方針3の知識学力もさることながら、地域社会で、そして世界で活躍できる諸々の力に注力し、それらを伸</p>

<p>総合政策部長兼魅力創造室長</p>	<p>ばし活かすことで豊かな人生が歩めるよう支援するの部分につきましては、バランスが取れているように見えて逆にどっちつかずという印象にもなる書きぶりという印象を受けました。両論併記によって迷いが見えるという感じですが。前回の会議では求められる知識・学力が明らかに変わってきており、従来の学力観を更新する必要があるという議論の流れだったかと思うので、知識学力もさることながらという部分の書きぶりでもいいのかどうか、皆様にご検討いただければというご意見をいただいております。以上です。</p>
<p>東委員長</p>	<p>ありがとうございます。それでは、今いただいた事前のご意見に対しまして、副委員長の植田教育長の方から、まず、中原委員からいただいた、いわゆるギガスクール構想について、現時点で考えていることについてご説明をさせていただきたいというふうに思います。</p>
<p>植田副委員長</p>	<p>それでは簡単にご説明させていただきます。これは昨年秋ぐらいからスタートしているのですが、ソサエティ5.0という新たな社会において、どのような人材を作っていくかという大きな流れがございます。詳しくはお手元の資料で確認いただきたいのですが、この中で来るべき未来の予測ということで、先ほど白井委員も言及ありましたように、10年20年先というタイムフレームでとらえる必要があるかと思えます。</p> <p>その中で、下の括弧にありますように、予測できない変化を前向きに受け止め主体的に向き合い関わり合い、自らの可能性を發揮しより良い社会と幸福な人生の創り手となるための力。これにフォーカスした人財育成が新学習指導要領の改訂の方向性と位置付けられております。</p> <p>ちなみに、これらを受けまして、昨年の11月首相官邸からのデータにありますように、大きな人材育成の取り組みが示されておりまして、とりわけ学校教育に着目した場合には、先ほどありましたICTの環境整備と、そのハードウェアの上に乗るソフトウェア、アプリケーション、例えばEdTechのような仕掛けが重要になるということで、重点化されております。そして、昨年末に文部科学省よりギガスクール構想が打ち出されました。これは、児童生徒1人1台の学習用コンピューター環境を、向こう4年かけて実現し、あわせて高速大容量のネットワーク環境も来年度中に整備するということです。</p> <p>ただし、これだけですと箱と線になってしまいますので、この上</p>

<p>植田副委員長</p>	<p>で経済産業省が、未来の教室という新しい教育のあり方について具体的に進めています。これらは一体不可分でありまして、あえてまとめますと教育革新とはPersonalizationとSTEAMです。これらは個別最適化と、Science, Technology, Engineering, Art, Mathematicsですが、このような教育を進めていこうということでもあります。</p> <p>詳しくは、この全体像をご覧ください。今月16日、文部科学省、経済産業省主催の首長/教育長/指導主事向け説明会の中のスライドでございます。</p> <p>要点をかいつまんで申し上げますと、こういった目標に対して、1つめはデジタル教科書/教材の活用、2つめに、それらを活かした主体的対話的で深い学びの拡充、3つめに、AIドリルなどを使ったEdTech (Education Technology) という3つの段階を示されているわけです。イメージがつきにくいと思いますので動画をご用意しました。</p> <p>これらの動画は全容を網羅したものではなくあくまでもイメージを共有する意味でお示しするものです。</p> <p>なお、経済産業省の未来の教室のコンセプトでも、第1ステップ、第2ステップ、第3ステップと分かれておりまして、文部科学省と歩調をあわせていると言っていいかと思います。では最初にまず、デジタル教科書の具体的なイメージでございます。</p> <p>※動画の投影</p> <p>ということでございます。続いて、今度はこの文部科学省が示している、デジタルツールを使った主体的、対話的で深い学びの事例です。なおこれは文部科学省の公式プロモーション動画です。</p> <p>※動画の投影</p> <p>はい、続けて見ていただきます。第3フェーズのEdTechのAI教材の例です。</p> <p>※動画の投影</p> <p>こういった教育革新において知識習得にかかる時間を短縮/圧縮/効率化して、その空いた時間を、いわゆる主体的対話的深い学びにというのが目標として掲げられておりまして、並行して別室登校や</p>
---------------	---

植田副委員長	<p>不登校といった子ども達に学びの機会を提供するということがあります。先ほどの白井委員のご指摘でもありましたように、決してその学力の差異を吸収するだけではなく、様々な環境、状況にある子ども達に個別最適化された教育機会を提供することが、このG I G Aスクール構想×未来の教室です。</p> <p>以上、簡単でございますが紹介をさせていただきました。</p>
東委員長	<p>ありがとうございます。和田委員の方からめざすべき大きな像というものを一旦議論した後に、理念や基本方針というものを定めていった方がいいのではないかとのご指摘がございましたので、お手元に資料番号5という形で、皆さんに事前資料を送らせていただいた後、いったんドラフトという形ではなりますが、望ましい姿というところをたたき台として、私と教育長の間で話をさせていただきつつ設定はいたしました。</p> <p>ただ、これが確定ということではなくて、まずこの部分について、今、他の委員からもいただいた意見も含めて、ここを議論させていただいて、その後に、理念や方針のところの議論に踏み込んでいけたらと思うのですが、教育長の方から簡単にこの部分についてご説明をよろしいでしょうか。</p>
植田副委員長	<p>あくまでもたたき台ということで捉えていただきたいと思います。子ども像、学校像、行政像ということで3項目、あらかじめ委員の方々からご提示もいただいておりますので、それらをまとめてみた次第です。</p> <p>子ども像というのは、何々ができる子どもというのを最後につなげていただければいいかと思います。10年～20年先の社会において健康で安心して満足できる生活ができるよう生き抜く力を身につける・・・そのようなOECDのEducation 2030に示されていることから引用しております。</p> <p>キーワードだけ押さえますと「新たな価値の創造」、「責任ある行動ができる」、それから「対立やジレンマを克服できる」という、こういったところが要素となっております。ですからこれらは、決して四條畷市の子どものみならず、それは日本でもグローバルでもすべてにおいて共通する、ある意味子ども像の理想系というふうに設定してみました。</p> <p>続いて学校ですけれども、そのような子ども達を育む上で、必ず卒業後は社会人としてということから、二つの意味の自律、1項目が自ら律する自律、2つめは、自らの足で自ら立つという意味での</p>

植田副委員長	<p>自立が重要になりましょう。そして地域とともにある学校ということで、最終形はコミュニティスクールも意識しながらこのようなイメージを掲げました。</p> <p>行政像でありますけれども、これも家庭、学校、職域、地域と各領域においてという点に着目して、その中で成長できる場の機会の創出ということが、行政の役割であろうという考え方です。二つめはもうすでにお示しいただきましたように、教育、福祉、医療の連携が重要であります。これらの連携によって安心安全が保たれるのはもちろん、それからさらに積極的にそういった弱い立場、つらい境遇にある人達に、手を差し伸べるということが行政としての責任であろうと。以上のような趣旨でこのようなドラフトとさせていただきます。</p>
東委員長	<p>ありがとうございました。和田委員からそれぞれ3つ、子どもと学校と行政の像、それぞれを考えていた方がいいのではないかというご意見を受けまして、このような形でドラフトという形で挙げさせていただきます。他の委員から既に社会に開かれた教育の部分であったり、早くからいろいろな職があるということが分かったほうが良いというご意見をいただいているなかで、まず、この望ましい姿、ドラフトについて、各委員からそれぞれご意見をいただけたらなというふうに思うのですが、二見委員や佐々木委員から、もしございましたら。</p>
佐々木委員	<p>すいません、事前にたたき台というところに意見を出していないので申し訳ないんですけども、漠然とした自分の感触で最初の印象で言いますと、言葉は悪いんですけども、使い古されたフレーズみたいなことが多かったなというのが全体の印象でした。そういう中で、和田委員がおっしゃっているように、要はビジョンを明確にというか、望ましい姿、教育においてゴールはないんですけど、しかし一定のあるべき姿というところを押さえないとという意見には非常に同感です。</p> <p>今、ITの問題とかいろいろも出てきているんですけど、こういうことを議論する時には、必ずメリット、デメリットということをしかりと表に出す必要があると思っています。例えばITを使っていくことのメリットは、映像で文科省の方がご説明をいただいたこともあるのですが、デメリットは何なのか。そこもしかりと出し合いながら、その中で、バランスのいい育ちというところを探っていき、それが意味では、望ましい姿になっていくのかなと</p>

<p>佐々木委員</p>	<p>いうふうに思います。</p> <p>例えばですね、先ほどの映像にもあったのですが、間違ったら今までは自分で考えなければならなかったけれど、もう自動的にどこが問題だとして出してくれるのでわかりやすいという、それを子どもが肯定している意見がありました。危ないなと思いました。失敗したのはなぜなんだろうっていうことを、自分で考えるというプロセスの中で、いろんな気づきがあると思うんですね。やっぱり教育というのは、与えられる受け身なものではなくて、内なるものから学びたいという意欲が、力を発揮させる原動力になると思っています。そのためには、まず子ども達自身が気づく力を養わなかったら、どんな便利なツールが出てきても、受け身になるのかなと思うのです。</p> <p>実際に大学で授業を持っていて、この十年ぐらいの期間で気づくのが、自分で考えて、批判的にいろんな角度から考えてみることに慣れていない学生が増えているのではないかということです。授業者が言ったことをうのみにしちゃいけないよって、何かそんなことすら言わなきゃいけない、だとすると、いろんな角度から新鮮な視点でものを考えるための気づく力っていう言葉をどこかに入れて欲しいなど。</p> <p>それから、AIとかテクノロジーが進んでいくことを、色々なことをテレビ等のメディアで議論がされていますけれども、本当に人間が人とコミュニケーションをとる。顔と顔を突き合わせて意見を言い合うということの力が奪われていってしまうと、何かとんでもないことになるのかなというふうに思いますので、やっぱりそういう機器を使いつつ、人間が生で話をしてみる、心と心が通じ合うというようなこと、つまり繋がる力ですよね。これを、教育の中で培う。その結果、新しいものが作り出されるのかなというふうに、感じているところです。</p> <p>少し意見になっているかどうかわからないのですが、子ども像についても学校像についても、学校目標とか校長室に行くとよく書いてある言葉や熟語が並んでいる感じがしてならないので、もう少し四條畷らしいクリエイティブな感じの言葉が選択されるといいかなというふうに思いました。以上です。</p>
<p>東委員長</p>	<p>ありがとうございます。二見委員はございますか。</p>
<p>二見委員</p>	<p>私の方も事前に意見を出せずで申し訳なかったのですが、基本理念のところを読ませていただいて、本当に率直に思ったこと</p>

<p>二見委員</p>	<p>は、耳触りの良いことがただたくさん書いてあるということですね。</p> <p>今、現場にいて思い感じていることと、ちょっとじっくり合わない感じがしました。この理念と方針に沿ってめざすというところでは、何も本当に文句はなくて、この通りにいけばいいなと思うのですけれども、これを出してみても、今、四條畷の小中学校とかです、そういったところで、この通りにやっというふうに感じられる学校現場ってどれぐらいあるのかなと。そんなことよりも、もっと、現状の問題をどうするかとか、そういったところが出てくるのではないかなというふうに感じました。</p> <p>全体的に、先ほど和田委員が出してくださった意見と近いのですけれども、もう少しインパクトのある形でわかりやすい理念があると、入ってきやすいかなと思います。この記載の理念はとてもいいことが書いているんですけれども、少し長いといいますが、スッと入ってきにくい部分があるので、そこは書き方とかの問題かとは思いますが。インパクトのある短いもので四條畷市がどういった教育をしていきたい、どういう子どもを育てたいかというところが明確に分かるといいなというふうに思ったのが一つと、先ほど言った現場の状況と、この理念というのが、少し乖離しているような印象を受けました。</p> <p>この望ましい姿という資料についても、すべて未来に向けて、進めていける子ども像というところで、それは意図してそのように書かれていると理解していますし、これ自体、とてもいいと思うんですけれども、現状を見ていると、もっとその子ども自身の、現在のそれこそ自己肯定感であったり、学校にまず居場所があるとか、学校だけではなく、社会、地域にも、居場所があるというようなところを押さえ、現状をまずしっかり整えるというようなところのものが入っているといいなと。</p> <p>新たな価値を創造できたり責任ある行動ができたり、困難に立ち向かえるっていうのは、自分をしっかり信じられるところまで育てている子どもがそうなるので、そういう子どもを基本的には育てたいということになるのだろうなとは思いますが、自分を信じてることができる子どもを育てるようにしたいという部分を、一つ入れていただけたらいいなと思いました。</p> <p>後は、ITの先ほどの件については、今、佐々木委員が言ってくださったことと本当に同じ気持ちで、メリットは分かった、デメリットって何かあるのかなと。IT等を入れたら、きっとこう学習意欲も湧いて、いい効果が出る部分もあると思うのですけれども、正直言うと今学校に行き、それを入れたらみんなが元気になるかな</p>
-------------	--

二見委員	<p>と思うと、ちょっと分からないなというような印象を受けました。</p> <p>それはやってみないと分からない部分もあると思いますが、もっと何かこう、根本的な人としての支えがあるというのがまず土台にあって欲しいというか、そのようなことを思いました。以上です。</p>
東委員長	<p>ありがとうございます。今、いただいたご意見の中で、書きぶりのところ、長さとか表現の分かりやすさとか、これは調整していいことかなと。</p> <p>いわゆる佐々木委員からお示しいただいたような気づく力であったり、繋がる力という部分、これはもう本当に根本をなすところ、自己肯定感、支えていくとか支えられるというこの表現というのは、確かに根底に必要なものかなというふうに私としても思いますが、これまでのご意見や、ご両名のご意見を受けて、和田委員や中原委員からもしあればお願いします。</p>
和田委員	<p>まず、こういう形で子ども像、学校像、行政像と、急遽作っていただきどうもありがとうございました。その上で少し気づいたことをお話しさせていただきたいのですが、特に子ども像のところは、副委員長おっしゃったように、OECDのところから取ってきたということなんですよね。ですので、かなり洗練されている観点だと思うのですが、逆に言うと、どの地域でも使える観点だなと思いました。</p> <p>せっかく作るのでしたら四條畷ならではというのが何か欲しいなという気がするんですよ。逆質問をしたいのですが、私は四條畷に生まれ育ってもいませんので、委員長、多分生まれ育っておられると思うのですが、やっぱり四條畷の良さって何なのかなと。</p> <p>例えば、人懐っこいとか、地域のこと好きだとか、なんかそういうね、四條畷におられたからこそ、やっぱり気づいているこの良さというところをね、ぜひ少し、仰っていただいて、そういう言葉を子ども像のところに入れ込んで、皆でそれをまとめるような形にできたらいいなと思いながらお話を聞いていました。</p>
東委員長	<p>はい。私は公立幼稚園、公立小中学校、公立高校を出てきて、全部四條畷を出ていますので、恐らくどっぷり四條畷の公立の教育を体験してきた身かなというふうに思います。</p> <p>四條畷市そのものの良さというところでいきますと、市自体のブランドメッセージというものを、直近作成いたしました。それは何かというと、そのまま言うと「市全体、自然体」というワード</p>

<p>東委員長</p>	<p>なのですけれども、何を表しているかということ、若手職員が中心に考えてくれたのですが、まずこの環境が、大阪市内から15キロメートルしか離れていないにもかかわらず、これだけしっかりと山があり、自然環境が身近にある、電車を降りれば目の前に山が広がっているというような光景。そういう自然があるということ、もう一つの意味は、やっぱり人々の温かさ、これは他市の市長さんと話していても、明らかに住民の方々の、いい意味でのおせっかいといえますか、近さ。自治会加入率も下がってきているとはいえ、他市より高いというところでありました、やっぱりそういう良さがあるかなと。</p> <p>結果として何が起きているかということ、例えば交通事故が起きる確率等は、北河内で一番低くなっています。恐らく、相互に見守り合うじゃないですけれども、そういうことが働いているんだと思うのですが、そういう良さ。ここは、まず四條畷がブランドメッセージとしても出していますが、あると思います。</p> <p>もう一つ先に行けば、我々も全国学力調査とかが、まだない時代に小中と育ってきたときに、この地域としてやっぱり最初に、いわゆる旧制中学、四條畷高校ができています。枚方市とか、もっと人口が多いところではなくて、四條畷市にできた。</p> <p>これは、やはり歴史的に早く四條畷が発展してきた。鉄道がその時代にできて、早くから発展してきているので、そういうような核となるエリアで、核となる旧制中学もできた。特に、ご高齢の方とかとお話をしても、やっぱり教育というところ、「本来は教育の町なんだ、四條畷は。」ということの思いは、他市のまちより非常に強いのではないかなと思います。</p> <p>結果的な学力がどうこうというのはまた別に置いて、自分達のところに、最初にそういう旧制中学校があったという、その誇りといえますか、これは他市よりも強く持っているというのが、ふわっとした話になりますけれども、今申し上げたような点が四條畷っぽさになってくるのかなとは思いますが。</p> <p>中原委員何かございますか。</p>
<p>中原委員</p>	<p>教育理念のところ、先ほど和田委員からお示しの堺市のシンプルな表し方の例がありましたが、先ほど委員長が仰られた、市全体が自然体に繋がるような教育の目標を設定してはいかがでしょうか。僕の一つの意見としては、「子ども像」はなくていいのかなと思います。というのは、様々な学校では、めざす子ども像を掲げており、その例で「明るく元気に挨拶できる子」というのがあったりし</p>

<p>中原委員</p>	<p>ますが、明るくなくて、元気がなくて、挨拶できない子を大人の価値観で排他的になるのは違うと思います。それぞれ子どもには特徴があるはずで、我々大人の想いを投影した子ども像を設定するのは、本来のその子の可能性を潰す可能性があります。</p> <p>私が関わっている札幌新陽高校のビジョンは「本気で挑戦する人の母校」を掲げています。その本気で挑戦する人っていうのは、それぞれの解釈が様々あり、教員を含めて関わる人が、一丸ではあるが一樣ではない教育現場という点が重要で、多様な選択肢が存在する環境をめざしています。ビジョンの解釈はそれぞれであり、そこに齟齬があれば都度対話し、確認する。そのように、日々変化を起こせる文化が学校として大事なマインドだと思います。</p> <p>先ほどの、学習ツールの話にも当てはまりますが、ICTを活用することが目的になれば、ツールを画一化するだけになります。児童・生徒が様々な選択肢から自ら決断しているというプロセスを蓄積することが、めざす学習機会と思います。また、先ほどの事例紹介で教員の方の発言で、授業のゴールは教員で持っているとなりましたが、ゴールは持たなくていいというのが僕の考えです。ゴールをめざすというより、個人がゴールを設定でき、することが重要で、その設定したゴールに向けてプロセスをアセスメントするために観察するという視点を学校現場で浸透してほしいです。今回、教育大綱、教育振興計画を策定するうえでは、その新しい教育効果の価値観を率先して取り組んでほしいです。</p>
<p>東委員長</p>	<p>ありがとうございます。望ましい子ども像ということの規定しないということは、おそらく、その子その子の良さが生きるようになるというような表現になるのかなと思います。今回あえてこういう形で望ましい姿っていう形で3行書かしていただいている、確かによく出てくるフレーズでしたり、最近使われている単語にはなっていますが、今、せっかく中原委員から、そもそもこんな子どもがいいと規定するという事がそもそも違うのではないかなというような、根幹に関わるご意見をいただきましたので、それに対して他の委員から何かご発言あればお願いします。</p>
<p>二見委員</p>	<p>はい。なかなか斬新な意見で、そういうこともあるなと思いました。私はいつも自己肯定感ということばかり言っていますけれども、学校現場では自己肯定感の低い子どもがすごく多いんです。</p> <p>例えば、ご家庭がすごくしんどい場合でも、学校の友達や先生と</p>

<p>二見委員</p>	<p>過ごすことで自己肯定感を育めることがあると思っています。お家がどんなにしんどくても、周りが変なことばかり言う大人ではなくて、せめて学校の先生は、あの先生はまともなことを言ってくれていたなということ、10年後ぐらいに思い出すよってというようなことをいつも学校で先生方と話をしています。</p> <p>なので、こういう子どもであって欲しいというよりは、自分は生きていていいんだと、自分はこのように生まれて、生きていて、それがいいことだと思える。そうした思いを絶対に子どもにはもっていて欲しいことです。これは当たり前のことかもしれませんが、当たり前が持てない子どもがたくさんおられるので、四條畷市の子は、みんな何ができなくても、自分が生きていて良かったと思える子なんだというところがあったほうがいいなと私は思いました。以上です。</p>
<p>佐々木委員</p>	<p>まさに中原委員がおっしゃったように、望ましい姿というのは、私は自分らしく生きることに自信を持って臨める、挑戦もできるっていうことをイメージします。そのためには、今、ダイバーシティとかカタカナの言葉で言われていますけれども、多様性を認め合えることが大切。</p> <p>例えば本当に小さなことですが、精神的経済的な自立とか健全とかって言葉でもしかすると、ある種の子ども達を排除する言葉になるかもしれない。だって、人に、経済的にもメンタルにでも頼りながら、健全って一体何をめざして健全かよくわかりませんけれども、それでもその人がそこに存在していることが素晴らしいじゃないですか。</p> <p>だから、いろんな生き方をちゃんと受容できる四條畷市であって欲しい。なので、その部分をめざしてもいいと思うんですよ、ゴールで。だって望ましい子どもの姿っていうのは、中原委員がおっしゃるように他者が決めることじゃないですよ。一人一人が自分らしく生きるということだと思うので、そういうことも含めての概念で入れてもいいかなというふうに思っています。</p> <p>ちなみに、私、スクールソーシャルワークの立場ですが、文科省が出している、教育相談の充実の中のガイドラインで出てくる言葉がですね、子ども達の一人一人の生活の質を高め、それを可能とする学校地域を作るって書いてあるのです。それが一番私が気に入っている言葉なんです。</p> <p>子どもの生活の質ってみんな違います。でも、それぞれが自分らしく生きる、それぞれの生活の質を高めていくことと、それを自己</p>

<p>佐々木委員</p>	<p>責任じゃなくて、それを可能とする学校であり地域でありっていう辺りがすごく端的で分かりやすい。なので、先ほど委員長がおっしゃったような四條畷らしさというのは、教育の本質だと思います。</p> <p>先ほどの旧制中学校の四條畷中学校のことをお出しになりましたけれども、私も記憶が曖昧なのではっきり言えないのですが、もっと昔からこの北河内からずっと広い範囲にわたって最初にできた小学校が確か四條畷で、四條畷というのが、教育の最先端をいていたんだというふうに思った記憶があるのは確かです。</p> <p>だから、子ども達一人ひとりの生活の質を高める。それは当然自己肯定感が高い、自尊感情が高いということと切り離して考えることができなくて、そのあたりが、教育がめざしているミッションだと思っていますので、ぜひちょっとそういう言葉が入ってくるというなと思います。</p>
<p>東委員長</p>	<p>ありがとうございます。和田委員何かございますか。</p>
<p>和田委員</p>	<p>皆様のご意見をお聞きしていて、委員長がパッとおっしゃったんですけど、例えば、それぞれの良さが生きるとかね、そういう言葉っていいなと思ったんですよ。本当にそれで。それぞれの良さが活きる教育の町、四條畷とかね。こんな理念がポンと一番上にあれば、いいのかなっていうふうに私はお話を聞いていて思いました。</p> <p>そういう、おっしゃっていただいたように、それぞれに、自信を持って生きていって欲しいという。それは、どんな方向でもいいので、そういう子ども達をみんなで揃って育みませんかというふうになっていったらいいなと思います。皆さんの良いご意見をお聞きできたというのが私の感想です。</p>
<p>東委員長</p>	<p>ありがとうございます。先ほどの動画のところできくと、ツールの側面ばかりがフォーカスされたのですが、中に入ったのは、一斉に何かを全員に対して教えるというものから、それぞれが自分の課題に向き合う。これは、今の明るく元気に、みんなそうあって欲しいというところから、それぞれの良さが活きるというものへ理想像が変わりつつあって、たまたまそれに伴ってツールが変わってきているというような、ツールありきでは決してないと思います。</p> <p>今日、2名の委員は、本日は出席ができておりませんが、せっかく今、こういう形で議論させていただく中で、子ども像のところはどういうフレーズを使うかは別にして、あまりこちらで、こういう子、明るい子などと規定せずに、「それぞれの」という部分、</p>

東委員長	<p>或いは「自己肯定感」の部分でございましたり、そのあたりを我々でもう一度考えさせていただいて、最終的に、お示しさせていただくという形で、よろしいでしょうか。ありがとうございます。</p> <p>逆に、学校、行政、支える側についてご意見がもしあればいただきたいなと思うのですがいかがでしょうか。</p>
佐々木委員	<p>続けて申し訳ないです。働き方改革でいうあたりで、私達の仲間の中には、先生達の業務というか、特に子どもの問題に対応していることで、時間がかかるから私達が担当してあげますというような非常に単純な発想をする人達もいるのですけれども、自分は教員だったので、それは違うなと思っています。</p> <p>やはり子ども理解ということを出してしまったら教育は成立しない。だから、そういう意味では、子ども理解というのは授業だけではなくて、様々なところで、たとえば子どもの自尊感情を育てていく場であったり、いろんな人と出会う場であったりした時に、個々の子どもを理解していくっていう営みは、絶対不可欠になります。ここはしっかり押さえないとダメです。</p> <p>もう一つがですね、前回、私現場で強く感じているのは虐待のことを先生方は知りませんっていうことを申し上げましたけれども、付け加えて言いますと、先ほどね、中原委員がアナログでもいいんじゃないですかって、そこも含めますと、今の若い先生達は、学校の代表電話で保護者にお話しする術がないです。若い先生は、小さい時から携帯電話でターゲットを決めてやりとりをすることに慣れていらっしゃるので、誰が出るか分からないところにお電話をかけるというスキルすらない。</p> <p>結果、保護者と大したことないことでもめて問題化させてしまうという現状が、全国多分どこもあるかなと。そうするとその先生だけを責めてもしょうがなく、子ども達自身に様々なことを提供していかなくちゃいけない教育者の方がですね、もっと色々なことを学んだりとか教員同士で意見を交わすような場を、今は意図的に設定していく必要があって、それを意図的にやらないと、先生方が情報とか人の考えを得るのが全部パソコンを通しての話になっていきます。</p> <p>そういう意味では、行政として、学校現場、教育現場とか、保育所、幼稚園もそうなのかもしれませんが、現場のどこまで踏み込むんだという別の問題もあるかもしれませんが、ただ、そういうことを仕掛けていくことをサポートしていただかないと、各学校の学校長だけに期待するっていうのはもう無理がある状況かなっていう</p>

佐々木委員	ふうに、常に感じているところです。
東委員長	<p>ありがとうございます。子ども理解という単語をたくさん使っていただいて、白井委員からの事前意見にも、子ども理解というワードをいただいています。結局、子ども理解をするために、その時間を確保しないといけないから働き方改革があるのであって、働く改革をすることによって子ども理解の時間まで減らしてしまうのは本末転倒ということですね。ありがとうございます。</p>
佐々木委員	<p>データというところを集めていくというのは、様々な機器を逆に使ったほうがいいと思うんです。ただ、そのデータを理解していくのにAIの力を借りるという方向で研究も進んでいるのですが、最終的に人間味というところで、人の人生というところに思いをはせながら、人間味をのっけていくのはやっぱり人間なんですね。その場を確保していくっていう部分なくして、今、いろいろ議論をして、これから考えていく素晴らしいフレーズをめざしていくこと自体も難しくなってくるのかなというふうに思っています。</p>
東委員長	<p>ありがとうございます。やはり和田委員、教員を育てられているお立場として、そのまま最終的に子ども理解、人間味の部分をどう付加していくかっていうようなご意見があったのですが、そのあたりというところで、いま求められている先生像も変わってきているのかと思うのですが、もしご意見等あればお願いします。</p>
和田委員	<p>佐々木委員がおっしゃったように、本当に子ども理解は、一番重要な点じゃないかなというふうに思います。ただ、今、ある小学校にね、働き方改革ということで、少し授業とか見せていただいたりするところがあるのですが、結局、先生方の様子を見てみますと、小学校の場合でしたら、朝、来られてから4時まで、もう授業でべったりなんですよね。4時になって、職員室に戻ってきて、ほっとする時間が1時間です。この1時間で、他の業務をこなさなさいなんて、実質無理なんですよね。</p> <p>その中で、働き方改革とか、早く帰りなさいと。それは先生方もパニックになってしまうと思うんですね。なので、もっと仕組みとして、先生方にゆとりの時間を作るということを、やはり考えていかないと、いけないかなと思います。</p> <p>行政の課題になるかもしれませんが、先生方は思いを持っています。だから子ども達を育てたいとか、子ども達を大切にしたい</p>

<p>和田委員</p>	<p>とか、そういう思いは、ずっとそれで抱えておられるのですけれども、そこにやはり、ゆとりというものがないので、なかなか、もう子どもに関わらずに、結局は、ここまでは私の仕事というふうに割り切ってしまう。悪い意味の割り切りをやってしまったりしているんじゃないかなと思います。</p> <p>これから、学校像とかを考えるのですが、校長先生だけじゃなくて、やはり一人一人の先生にも、こんな学校を作りたいよね、一緒に作ろうというようなところまで、先生方も納得できるようなものにしていきたい、していくべきかというふうに思います。</p> <p>また、それが行政のサポートのもとでね、この案であれば学校もできると思えるような案にしていきたいなというふうに思いました。</p>
<p>東委員長</p>	<p>こう、ポンと出てくる学校像ではなくて、現場の先生達も一緒になってめざす学校像を考えたらいいのではないかなというようなご意見かなと思います。中原委員ございますか。</p>
<p>中原委員</p>	<p>そうですね。今の働き方改革等と少し絡んで、僕自身も学校現場で取り組みながら感じることは、先ほど和田委員が仰ったとおり、学校の先生方は、まず授業というところがあって、それ以外の時間で子ども理解をすると考えた場合に時間がいくらあっても足りません。そのため、授業の中に子ども理解ができる仕組みを考える必要があるかと感じています。</p> <p>例えばですが、先ほどの授業で、プロセスも含めてゴールへの進捗状況も管理しながら進めなければいけない授業の場合は、子ども理解は無理です。進捗状況を全員合わせるために必死なので。ただ、課題設定のためにどう取り組んでいるか、どのようなコミュニケーションがあるかということを観察することが授業中の教員の役割なら、子ども理解というのは可能だと思います。</p> <p>実際、札幌新陽高校の探究コースでは、そのようにしています。授業中に教員は起きている事実をしっかりと適切に把握し、ログを取ります。</p> <p>例えば、私から見たA君、和田委員から見たA君、副委員長から見たA君というふうに、様々の授業で見たそのA君について確認できる仕組みをテクノロジー等を使い構築します。</p> <p>主観が横並びで可視化されることで、自分には見えていないA君の姿をお互いに確認し、その子の変化を協議できる。多角的な生徒理解をしながら、日々の学習を進めることができます。</p>

<p>中原委員</p>	<p>そのような学習設計をする場合、テストはできません。テストがあると、いつまでにどこまで学習するという教員の都合のスケジュールになり、観察したり生徒理解に費やす時間が疎かになります。</p> <p>また、先ほどの働き方改革では、僕自身は学校ではなく、社会側の働き方改革を推進する必要があると考えます。</p> <p>例えばですが、保護者の方に学校に来ていただきたい時に、仕事が20時までなので、20時まで待ってくださってというのが前提なんですね。新陽高校では緊急の生徒対応の際には基本的にそのような要望は受け付けません。お子さんがすごく緊急で、学校に来ていただく必要があるのに、仕事を優先するという社会のマインドを変化させる必要があり、それは企業の働き方に対する認識も変えなければいけません。</p> <p>その企業へのアプローチは行政が力強く進めてほしいです。</p> <p>学校で子どもに何か起きているときにすぐに保護者が来る、こういう仕組みがまずは根本的に必要だなと感じています。</p>
<p>東委員長</p>	<p>ありがとうございます。佐々木委員のほうからも、子ども理解に充てることができる時間がしっかり確保されることが大事だというご意見のなか、和田委員が授業がもう終わって、そのあとにまた子ども理解の時間を取るっていうのは構造的に無理があるという話を受けて、今、中原委員から、授業中に子ども理解の時間を当てたらいんじゃないかという、ちょうど申し合わせていたような形で、話自体は論理的に流れていきました。</p>
<p>和田委員</p>	<p>先ほど発言させてもらって良かったです。あと、地域との関係なんですね。先ほど委員長がおっしゃったように、おせっかいと、地域がね。逆にそのおせっかいって、すごく素晴らしいことだと思うんですよね。今の時代にあって。だからもっと地域の方のおせっかいを、学校の中で活かすというか、そういう学校像を、やっぱり考えていけたらなというふうに思っています。</p> <p>去年の2月に信州の上田市へ視察に行ってきたのです。そこでは学校に、休憩時間に、地域の方が入ってこられて、子ども達と一緒に遊んでくれているんです。ある小学校で放課後のクラブ活動に、地域の方がやってくれているんですね。例えばそんなふうにおせっかいっていう良さを、学校に取り込んで、そういう地域と共にやれる学校を作れたらすごくいいなと思っています。</p>
<p>二見委員</p>	<p>今のお話を聞きながら、今の自分が行っている四條畷の中学校っ</p>

<p>二見委員</p>	<p>て、なにが適しているかなということはずっと考えていました。</p> <p>先ほどの、地域の方が入ってきて遊ぶというのをしたら、でもそれは、教員が絶対に見ておかないといけないから、また仕事が増えるという話になるのかなとかですね。</p> <p>地域の方は学校にいろいろ言うてくるから、先生達が他にやることが増えるというようなこともあって、その調整は難しいのかなというのがあります。</p> <p>本当に私が思う、学校としていいものというのは、ぶれないところですけど、子どもの主体性や自己肯定感を育てられる学校。これがもう望むべき姿だと思います。そのために、ケース会議をしたり、時間を持ったり、子どもを理解したり、全部含まれることだと思っています。</p> <p>そういった子ども達を育てるには、学校職員が組織として関わらないといけないので、やはり学校が組織としてしっかりと対応できる。</p> <p>それは、ケース会議を行うなど、チームでやったほうが良いという意見がたくさん出ていますが、それは浸透しつつあるけれども、まだまだ、もっとできるんじゃないかというような段階にあるかなというふうに思っています。</p> <p>先生方は、非常に雑務が多くて、そこについて言えば、働き方改革といいますが、早く帰れるなんてことはやっぱりなくて、生徒指導の案件が入ったら、途端に遅くなります。カウンセラーも同様に。なので、授業をしっかりといただくということが第一です。授業がわからなくて、しんどくなる子どもさんが多いので。</p> <p>授業が上手い先生というのは、生徒指導の関わりがもう一つ上手くなくても人気だったりします。あの先生の授業は分かりやすいという。授業を第一にさせていただく。そして、子ども理解の時間を作ってください。</p> <p>しかし、たくさんの役割があって、事務作業は雑務が多いので、もうずっと前から思っていたのですが、それをどこか引き受けてもらえるようなものがないかと。その先生がやらないといけないことじゃないものを、何かこうできる術がないかというふうに、それはいつも見えていて感じます。</p> <p>本当に、先生方雑務の中で、その後、不登校の子どもさんの家庭訪問に行き、帰って来てもう8時半とか、そうこともやっぱりあるので。そういったところで、仕事量の多さというのを四條畷市は何か出来たらいいなと思います。以上です。</p>
-------------	---

<p>佐々木委員</p>	<p>誤解されると困るので、いいでしょうか。今、おっしゃっていたように、実は自分がずっと実践して行って、先ほどの、ホッととして帰ってきた4時から5時っていう1時間を、ケース会議に10年以上充てている学校があります。</p> <p>そこで、何が起こったかっていうと、気がついたら不登校ゼロ。だから結局その不登校解消のためのケース会議じゃないんですよ。この子の困りがどこにあるんだろうというところを、先生達が担任だけじゃなくて、どうしても小学校って担任王国になりがちなんですけれど、担任の子じゃないよね、学校がお預かりしている、という発想の中で、担任とそれ以外の先生達とで1人の子どもについて、色々な子ども理解をしていく。</p> <p>それは、先ほど授業だけの様子じゃなくて、子どもは授業だけで生きているわけじゃないので、やはりこの子の生い立ちから。この子の元々持っている特性があるかないかとか、得意が何なのかとか、不得意が何なのかとか、それから繋がり方ですね。人との繋がり方、家族との関係。様々な側面で、私達の言葉で言うと包括的アセスメントという言い方をしますけれども、全体像が分かってくると、そこで初めて、学校という場所で何が出来るのか、何が出来ないのか。そのことの延長線上に、では授業の中で、この子を活かすためにはどうするのか。この子だけが活かされるのではなくて、みんなと一緒にこの子が繋がっていて、この子が自己肯定感を高めるための授業はどうしていったらいいのか。プランの中の一つとして授業というのは、当然出てくるわけですね。それを、何でその10年以上それをやっていけるかという、先生達はその有効性を実感するからです。</p> <p>ケース会議というところは、実はその子どものためにやっているというその教師のミッションっていうのを、みんなで確認し合えるし、それから同僚としてチームを感じることができる。担任一人で考えなくていいんだという安心感と仲間意識。これを同僚性とね、和田先生、言いますよね。同僚性がどんどん高まっていく。</p> <p>ある中学校の方の教員や管理職の言葉なんですけれど、職員室の中で、子どもを語る言葉が温かくなった。今までは、あの子ができていないことを、みんなで共有していたけれど、頑張ったことを共有する雰囲気が出てきて、先生達の顔がやわらかくなった。そうすると、忙しく帰ってきてからの1時間が、逆にその先生に力を与えてくれるかもしれない。</p> <p>こういうことができるのが学校の力なんですよね。そのためには、先ほどおっしゃったように、教師じゃなければできないことと、例</p>
--------------	---

佐々木委員	<p>えば見ていると、私が昔教師だった時代よりも報告書が多すぎる。それこそ、どこかのデータを引き出して報告するのだったら、報告書書き専門の人をつけたらいいかなとか、そういう本来の教師でなくても出来る業務というのは、もう外注にしたほうが良いと思うのです。やっぱりそうじゃないところ、子ども理解等、教師がすべき本来の仕事のためにもっと丁寧に時間確保をしていくというのを、行政の方で後押ししていただきたいというふうに思います。</p>
東委員長	<p>ありがとうございます。今いただいたようなお話の中で、要は子ども理解を深める時に、授業だけで分からない所が、実はそういう観察をして、さらにこういう所に生き生きする瞬間があるんだなというところに繋がっていくっていう所にも、結局子ども理解の所にも繋がってくるんだなというふうに聞いていて感じました。</p> <p>いちいち議論を戻して申し訳ないのですが、望ましい姿という所でお話させていただいている中で、学校像の所は教員がチームとして取り組めるということと、子ども理解にしっかり注力できるというお話と、地域と共にあると、それは、先生と地域の人って対立軸になるのではなくて、間に入る方々もいらっちゃって、その中で共に考えていく、いわゆる開かれた教育ということは、結局そういうことかと思うので、そういった部分やフレーズを、また整理させていただいて、学校像の所は、また最終的に皆さんに見ていただけたらと思います。</p>
佐々木委員	<p>チームとして子ども理解に注力できるという部分もあるのですが、すごくその下支えですね。前回ももしかしたら申し上げたかもしれないのですが、学校の先生って異動が宿命なんですよ。公立の場合は。私立は異動があんまりないかもしれない。</p> <p>異動があると、何々先生がいた時には良かったという伝説になってしまうので、伝説は良くないですね。なので、子どもをそのチームとして理解していくということが安心してできるためには、やっぱり組織として、学校がシステムとして個々の子どもを支える構造があるということがすごく大事だと思います。</p> <p>そうすると、伝説の人が出てこなくなる。どんな人が異動してきても、その学校のシステムで子ども理解が進んでいくという形が不可欠かなと思います。</p>
東委員長	<p>仰るとおりだと思います。あの人がいたら良くて、抜けたら駄目で、こっちに行ったから今度はこっちが良くなっているというので</p>

東委員長	<p>は、根本的な解決になっていないということなので、それらも含めて考えさせていただけたらと思います。</p> <p>立ち戻ってきた場合に、行政像の部分です。それらをどう支えていくのかという話の中で、1つはその教員の方がどうしてもやらないといけないのかという業務をしっかりと行政側でサポートしていく、これは皆さん同じことを言っているから、それは繰り返し入れていけるかなと思いますが、さらにそれ以外の部分で、元々ドラフトはありますけれども、行政側としてこんな点が必要じゃないかというご意見があれば、さらにいただけたらなと思いますが、いかがでしょうか。</p>
佐々木委員	<p>先ほど教育長がお話いただいた中で、その学校外のデータの部分ですね、医療や福祉等のデータという所がまだまだケース会議でしっかり活用に至れてないんじゃないかと。法律上ですね、要保護児童対策地域協議会という所に上がってきている子ども達については、保護者の同意無くして、必要な情報を共有できるっていうのはもう既にありますよね。</p> <p>ではその四條畷市の要対協がどれ位機能しているのか、ちょっと私分からないので、すみません。</p> <p>これは一般的として、とてもいいネットワークが法律上、ちゃんと用意されているのだけれども、どれ位機能しているのかという所と、それから人材の育成ということと、人数等は全部リンクしてくる話なんです。そうすると、既存の四條畷市の要対協がどれぐらい機能できるかっていうことを吟味する事がないままね、福祉のデータをどうするのかということは難しい。</p> <p>それから、先ほど言ったように、要対協っていう所を使わないまま、医療や福祉の情報を共有する法的な枠組みはないと思います。だから、法的枠組みで、今、全国に知られているのはやっぱり要対協なんです。だから保護者の同意があれば色々な情報を取ることができますけれども、やっぱり支援を求める力さえ発揮できていない方っていうのは同意がなかなか取れませんので、そこをどういうふうに使っていくのかなんですね。一方で、実は今、学校が使おうと思ったら使えるデータがあるのに使いきれてないんですよ。</p> <p>それが、例えば小学校でいうと幼稚園指導要録、それから保育要録。それが上がってくる小学校に送られてきます。かなりのことが書いてあるのですけれども、ほとんどの小学校の先生はそれを活用していません。だから我々がケース会議に入っていた時に、小学校だったら幼稚園指導要録見ましょう、保育要録見ましょうからス</p>

<p>佐々木委員</p>	<p>タートします。</p> <p>今度は小学校の先生が、今、公文書として書かなきゃいけない6年間の指導要録、3年生の先生が困っていても、2年生、1年生の先生が書いた指導要録を見ません。見ればいろいろ書いてある。今ある情報を使いきれしていないという現実があるんです。</p> <p>中学校に行ったら小学校6年間の指導要録があがってくるのに使いきれしていません。新しいものを作る前に、今、既存としてあって使い切れていない非常に有効なデータや情報がある。今、指導要録の話をしました。養護教諭の先生の所にくるのは健康診断表という成長の記録。これは高校まで持っていく。これも使いきれしていません。</p> <p>だから行政としては、その指導要録とか、それから健康のデータである健康診断表というのも昔からある、子ども理解のための情報をもっと具体的にしっかり使いましょうということを行政から下していただきたいんです。</p> <p>そのうえで要対協を使っていく。さっき言ったその指導要録とか健康診断表は全ての子どもの分があるんです。要対協に上がってくる子どもの情報というのは、やっぱり要対協に上がってくる子どものみに限定されます。だから、今ある仕組みをどれだけ有効に使っていくのかということと、そのうえで四條畷市が、独自に例えば条例か何かその制度上、つまり法律違反にならないような形をもって、個人情報はどういうふうに扱っていくのかということの2段階になるのかなというふうに思っています。</p>
<p>東委員長</p>	<p>ありがとうございます。今の部分でいきますと、行政としてやっぱり幼保、子ども園の所から小学校の所の接続の部分と、小学校から中学校の接続の部分。小学校内での連携というのは学校内でワンチームとしてやってもらった方がいいと思うのですが、このおそらく切れめの部分をどれだけ繋いでいけるのかというのが、行政側として取り組むべき所じゃないかなというの、今、ひとついただいたのかなというのと、要対協の所ですね。それは確かに法律上、保護者の同意なくという、非常に他にはないようなことが認められている枠組みですから、それを有効的に活用すべきであって、何も新しいことをするというよりは、既存の枠組みをいかに機能させていくのかという所をご意見いただいたのかなと思います。</p>
<p>二見委員</p>	<p>四條畷の現状としては、要対協での連携については、一応機能していると思います。要対協にあがってる子ども達のことについては、</p>

<p>二見委員</p>	<p>学校はしっかりと共有していますし、子ども支援コーディネーターや生徒指導主事がしっかりと共有していますし、基本的には機能しています。</p> <p>スクールソーシャルワーカーの方のお力もお借りして、小学校とか幼稚園の時の記録を取ってきていただいたり、私は今、基本的には中学校にいますけれど、中学校で何かあった時にケース会議をする時には、その情報を学校が全部やっていて、医療、病院だったりすると、保護者の連絡をしてから病院に出向いたりとかですね、病院から言えないとかいうことで、断られることもありますけれども、そういった形で、学校の先生方が情報を取るのにかなり奔走してやってくださっているのが現状です。</p> <p>あと、四條畷の子どもが、ずっと継続して積み重なっていくためのツールがありましたよね、つながりプラン。それも先生方全部、学年とか学校に配っているんですけど、あまりそれは活用されていないような所があるかなと。データを入れていくんですね、項目は端的に分かれていて、1年生、2年生とどんどん繋げていって、その切れめがないように、幼小中と連携が取れるようなものも作っていただいている、活用したらいいのですけれども、少しデータ入力とかそういった所でみんなにおそらく浸透できてない部分があります。</p> <p>そこは少し残念だけれども、でもせっかくそういうことの発想は、既にあるので、それがもっと活かしていこうというような働きかけが、されているとは思いますが、現状あまり活用されていないのでしたら、そこを少し検討する余地がたくさんあるかと思います。</p>
<p>東委員長</p>	<p>ありがとうございます。ある意味、逆に言いますと、四條畷としてはその要対協も機能はしているし、つながりプランもあるので、どちらかという強みとしていける分野じゃないかというふうに受けとめたんですけども、いかがでしょうか。</p>
<p>二見委員</p>	<p>強みとして受け取っていただけたらいいと思います。あの発想としては、教育委員会にはあり、しかし福祉の方がどう思っておられるかは分からないのですけれど、福祉の方も頑張ってくださっているとは思いますが、もっと連携できたらいいなど。</p> <p>今も、もちろん連携しているし、要対協も機能していますし、できているのですが、学校はもっと福祉と連携したいと思っています。</p>

東委員長	<p>なるほど。それが、先ほどの教員のそういう子どもに対して注力できる時間、子ども以外に注力できる時間の創出っていうことができれば、もっとデータを入力して、活用してと、繋がってくるのかなと思います。</p> <p>今、この分野で言うと、恐らく福祉と教育の連携の部分について様々なご意見をいただいたと思うのですが、その点についてでも構わないですし、他の観点からでも、もしあればお願いします。</p>
和田委員	<p>では、他の観点から話させていただきます。</p> <p>行政の役割として考えた時に、保護者の啓発というんですか、やっぱり保護者に対してなかなか学校がやろうとしても、こぼれてしまう方もおられますから、もっと広い観点でやっていただきたいというのと、先ほども言いましたけれど、地域の人々、せっかく、おせっかいという良い面があるので、その方々に学校に向いていただくようにしていただくというのが行政の役割かなと思いました。</p> <p>それと、これは今回検討している部分とは無関係なのですが、ぜひ教育委員会とかでやっていただきたいのは、しなくて良い仕事をはっきりと行政として決めてあげて欲しいと思います。今まで、課題があったからしなければいけない、これも課題があったからしなければいけないという形で、どんどん積み重なっていることが多いと思うのです。</p> <p>ただ、それがもう10年経って、今、本当に必要ですかというようなこともあると思うのです。具体を言えないのですけれどね。</p> <p>なので、そういう観点で、今やっている仕事の見直しというのは是非してあげて欲しいなと思います。そのことが、学校現場を楽にすることに繋がると思いますので、これは理念とはちょっと関係ないのですけれど、意見としてお聞きいただけたらと思います。はい。</p>
東委員長	<p>おそらく教員の方が教員の方以外でもできることをやっていくっていう所は、それはやらないといけない仕事という前提に立っていますけれども、今、和田委員が仰っていただいたのは、さらにそもそもその仕事自体が本当にやり続ける必要があるのかっていう観点も、やっぱり判断しづらいので、全体として行政側が、決めていってあげたほうが良いと。よくあるのが、クラブの日曜日を休むとかとていう話で、一律を決めていくと。やはり、1校1校では判断しづらいものに対して、統一指針を示すのが行政の役割じゃないかという理解でよろしいでしょうか。</p> <p>ありがとうございます。何か中原委員他にありますか。はい。</p>

<p>中原委員</p>	<p>行政の役割を、学校、地域、家庭を繋ぐ人が育つプラットフォームとして捉え、その子の成長の記録や様々な情報の蓄積と連携をスムーズにする働き掛けが必要だと思います。</p> <p>現状では、活用されていない事実があるので、その理由が何なのか、知らないだけなのか、活用しにくい運用になっているのかなど要因を分析する必要があります。行政で取り組める内容になると、法的な所での仕組みを乗り越えて、個人情報はどう扱うのか、ブロックチェーンの技術を使い行政全体で情報管理は高いセキュリティで行うなど、現代のテクノロジーを推進することも考えられます。</p> <p>それがここに書かれている家庭、学校、地域全てを行政が繋ぎ、人が育つ環境のプラットフォームとして行政が機能するといえるのかなとは思いました。</p>
<p>東委員長</p>	<p>ありがとうございます。一定、議論が収束といいますか、発散というよりは、同じような論点に近づいてきたのかなという所があります。</p> <p>今の議論は今の議論で大切にさせていただいて、事前に中原委員や藤原委員からいただいている中で、社会とかで学ぶ機会であったりとか様々な職業があるということを知った方がいいのではないかな。それがやっぱり行政としても何か、行政像の1行めの所に近いのかなと思うのですけれども、そこに関して何かもう少し、こういう像がいいのではないかなとか、ご意見があればいかがでしょうか。</p>
<p>中原委員</p>	<p>例えば学校でもキャリア教育に取り組まれているとは思いますが、地域だけに囚われない、日本全体もしくは世界全体の職業に触れるための仕組みを作るのも行政が担えるのではないのでしょうか。規模を大きくできない場合は、地域に特化して、身近な所から、四條畷市の産業や、中小企業と連携し、現代の働き方、生き方に触れる機会を設けるのも重要だと思います。</p> <p>あと、先ほどの自然という所を有効活用した市の資源を活用し、子ども達がプロジェクトを通じて、それぞれの価値観を持ち、それを共有するプロセスを経ることで、自立を育む学習の機会はすごくいいのかなと思います。</p>
<p>東委員長</p>	<p>ありがとうございます。事前に藤原委員からいただいているなかで、そういった所がこれからやっぱり必要なんだよという所が、先ほど和田委員からもありましたけれども、保護者自体がそこにしっかり理解があるのかどうかという所や、教員自身もそこに理解があ</p>

東委員長	<p>るのか、ここにアプローチしていかないといけないのではないかと いうようなご意見があるのですけれども、もし和田委員何かあれば お願いします。</p>
和田委員	<p>はい。当然キャリア教育という観点で言いますと、大学に行くこ とがすごく目的になっているという、保護者の観点で言いますよね。 やはり、良い大学、良い仕事という結びつきは持っておられる方 が多いのか、本当に今は幻想になっていますよね、結果としては。 実際、上手くいかないということがあって、そこが幻想なんだと いうことを保護者に知ってもらうことが、結局子どもを追い詰めな いことにも繋がっていくのだろうなというふうに思っています。 そういう意味で、保護者の教育ということも必要なんだなという ふうに反映させていただいたんです。あと、やはり仕事ということ に対して、この前、NHKのニュースでね、小学生に1番なりたい 仕事は何ですかという質問をしたらユーチューバーと。私もびっく りしまして、あれを仕事というふうに捉えるのかと感じまして、す ごくびっくりしていたんですけれど、そういうのが今実態なんでは しょうね。 確かにそれも将来の仕事なのかもしれませんけれど、やっぱりも うちょっと地に足着いた仕事というんですか、やっぱりいろいろな ものが作られて、それのお世話になって私達は生きているんだとい うような事をね、知っていくようなキャリア教育というんですか、 そういうことも含めたキャリア教育って必要なのかなという気がし ます。 地元にある例えば中小企業、同友会とか、商工会とか、そういつ た所ともね、是非、行政がそういうマッチングをしていただいて、 やはり子ども達が学べる場を作っていただくとか、そういったこと もやっていただけると、学校としてはありがたいんじゃないかなっ ていう気がします。</p>
中原委員	<p>ちょうど先日、中学校でキャリアの話をした時に、ユーチューバ ーの話が出たのですけれど、1つの仕事として捉えることはいいと 思います。 しかし、ユーチューバーの仕事の内容を適切に理解する機会は持 つべきだと思います。私は将来ユーチューバーになりたいって言っ ている中学生には、その時点でなれないよと少し厳しい意見を言 います。 なぜなら、ユーチューバーは別に小学生でも中学生でもなれるか</p>

<p>中原委員</p>	<p>らなんです。逆に言うと、今すぐやろうとしないあなたはなれないよって僕は言わしてもらいます。</p> <p>同年代ですでにツイッター、SNS等を使って、稼いでいる子はいます。ということは、そういう時代背景の流れも知らずに、ユーチューバーを将来の職業として言ってしまう時点で勉強不足ということです。また、ユーチューバーを3分の仕事と勘違いしている子もいます。3分を作るまでに必要なプロセスやスキルを知らずに話している子がいるので、どのようなプロセスを経るのかを知る機会を与えられればいいですね。</p>
<p>東委員長</p>	<p>仰るとおりかなというふうに思います。ユーチューバーがどれだけの努力をしているのかっていう所が、本当に大変なことをされていて、一部の方がいるっていうことを知らぬままっていうことですね。</p> <p>先ほど二見委員の話からも主体性の部分だったかと思うのですが、みんながユーチューバーがいいって言っているから、僕もユーチューバーになりたいって言ってみようのような、恐らく、真に主体性があれば、自分がこれが向いていると思ったことを、言えるはずなんですけど、みんなが言っているから僕もこれっていうのが、主体性が結局ないということだと思うのですね。</p> <p>そこが、なりたい職業の結果に繋がってきているって、まあ全部繋がっている話なのかなと聞いていて正直思いました。</p>
<p>二見委員</p>	<p>少しだけいいですか、今、中学校で、職業体験というのはあるのですけれども、実は学校を休んでいるなど学校生活が上手くいってなくてしんどい子も、職業体験はちょっと頑張ろうと出て、結構元気になって戻ってきたりするんですね。</p> <p>学校という所でちょっと煮詰まったり、行き詰まっていて、外の世界を観ていろいろ教えてもらおうと、少し視点が変わるというようなことが、やっぱり子どもなりにすごく受け止めている所が実感としてあるといいますか、ずっと休んでいたのに職業体験は行ったんだというような。職業体験は自分で電話をして、いいでしょうかということから始めてですね、先生達も周りでやきもきしながらですね、あんまり口出ししたら駄目なので「電話したかな」とか言いながら、すごく子どもたちを見守って、おこなっている。</p> <p>そうすると、普段学校で少し適用が悪いようなお子さんでも、すごく頑張って作業していたりして、先生にも褒められて、元気になって戻ってくるというようなことがあるので、キャリア教育という</p>

二見委員	<p>のは本当に大事なことだし、実際現場で体験してきたりすると、良かったなということが実感としてあります。地域の商工会議所だったり、外から来ていただいた講師のお話を聞いたり、自分達が出て行って経験するというのはとてもいいことだなと経験的に思います。</p>
東委員長	<p>本当にそれぞれの良さが活きるという所を考えると、当然算数が得意な子どももいれば、実は物を売ったりするのが得意な子だっているわけであって、それは授業の中だけでは分からないという所に繋がるのかなと思います。</p>
佐々木委員	<p>職親って昔いたんです。職親って言い方になっちゃったんですけど、要は職業の親方です。親方の所で子どもに社会、仕事を教えていくという、今はいなくなっちゃっているんですけども、経済界の中で、現代の職親みたいな仲間を作っている所があって、お好み焼き屋さんの千房さん、たしか非行だった子を育てて店長にするのですけれども、そこまでいかなくても、今の職業体験というのを10年、15年位前からスタートしたのですかね。</p> <p>最初のうちは、学校の先生が設定してという形だったのですけれども、やっぱり主体性とかということを見ると、職業体験の時だけじゃなくて、イベントとか何かの時に自ら訪ねに行くとか。</p> <p>例えば総合学習や社会科の中で、社会の事の中で課題が出てきた時に、別の次元の話じゃなくて、自分達には関係ない話じゃなくて、生活の中で一体どういう課題意識を会社の人とか、職業を持っている人、あるいは学校の先生でもいいのですけれども、その職業に絡めてどう感じているのかという、やっぱり自らが気付いて訪ねに行くという所からキャリア教育というのは始まっていくのかなと思うのです。</p> <p>それは行政だけの問題じゃなくて、やっぱり行政の方はそういうネットワークをどういう風に作って行って、教育の中でそのバックアップを受けながら相互のチャンネルをどういうふうに活かしていくのかという、やっぱり繋がっていく発想になっていくのかなというふうに思います。</p>
東委員長	<p>本当にいま仰っていただいたとおり、行政の役割が何かということですので、場作りということですね。ネットワークと仰っていただきましたし、中原委員もプラットフォームという言葉を使っていたいただきましたけれど、その場をどう設定していくのか。</p>

<p>東委員長</p>	<p>時間がなくなってきましたので、まとめになってしまうのですけれども、最後、行政の部分でやっぱりお話を聞いていて難しいなど思うのが、子どもの部分の話と学校の話を見せていただいたうえで、やっぱり行政が求められている所ってすごい膨大にあるんですね。</p> <p>ただ難しいのが、行政側もそれ以外の文脈でたくさんやらないといけないことが既にたくさんある。全部やっぱり行政だけで受けきるのも限界があるという所です。</p> <p>学校のを行政で受けとめたら、行政が今度はパンクしてしまいますので、ここが意外と難しい部分と言いますか、私もこの職が職なので、そこはやっぱり言うておかないといけないのかなというふうに思っています。</p> <p>当然、全体的にもやるのですけれども、注力点、行政としてここを頑張っていくんだと決めていかないと、あれもやる、これもやるというのは、どっちつかずというか、どれもできていかないというふうになるのかと思います。</p> <p>今日の時間の中だと、絞っていく所まではちょっと難しかったので、今、いろいろたくさんいただいて、本当はもう少し時間があれば、絞っていきけるかなとは思いますが、幸いもう一度、会議はございますので、子ども像の所、学校像の部分の所を今日いただいたので整理させていただきつつ、行政像は何個かこちらで準備をさせていただいて、最終的にそこも議論していきつつ、基本が決まれば、恐らく自然に基本理念と基本方針は導かれていくものになるかなと思いますので、そのあたりを、次回第3回で他の委員さんと共に議論できたらと思うのですけれども、よろしいでしょうか。</p> <p>まとめに入って申し訳ないですけど、もし追加でなかったら、この次第1の基本理念、基本方針については、こちらで終わらせていただいて、次第2のその他で、何かご意見であったり、追加、補足でお話していただくことがあればと思いますが、よろしいでしょうか。</p> <p>副委員長もよろしいでしょうか。</p>
<p>植田副委員長</p>	<p>はい、キャリア教育についていっぱいお話したかったのですが、また次回に。</p>
<p>東委員長</p>	<p>では、その思いは次にとっていただければと思います。ありがとうございます。</p> <p>もし、その他でも何もなければですね、これにて第2回の未来教育会議は閉じさせていただこうと思います。</p>

東委員長	よろしいでしょうか。 (意見なし)
東委員長	最後に何か事務局からございますか。
総合政策部長兼魅力創造室長	はい。それでは次回のご連絡をさせていただきたいと思います。第3回の会議は、3月30日の午後4時から。場所は本日同じく委員会室でございます。第3回会議では、本日の取りまとめ等をさせていただきたいと思いますので、教育大綱の素案という形で実施させていただければなと思っておりますのでよろしくお願いいたします。以上です。
東委員長	少しだけ補足させていただきますと、教育委員さんと市長で構成する総合教育会議がございまして、これまで2回の会議までの部分を1度、総合教育会議で他の教育委員さんの意見ももらいつつ、それらも踏まえて第3回のを議論させていただいて、それを最終的には総合教育会議で決めていくという形をとらせていただければと思っておりますので、よろしくお願いいたします。
東委員長	それではこれもちまして令和元年度第2回未来教育会議を閉会いたします。本日もありがとうございました。